

# 法 勝 寺 跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 法 勝 寺 跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび共同住宅建設に伴う法勝寺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

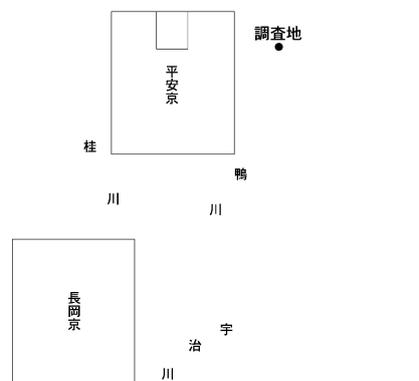
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 12 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- |          |  |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名  | 法勝寺跡   |
| 2 調査所在地  | 京都市左京区岡崎天王町 70 他                             |
| 3 委 託 者  | 株式会社日本エスコン 代表取締役 直江啓文                        |
| 4 調査期間   | 2007 年 10 月 24 日～2007 年 11 月 27 日            |
| 5 調査面積   | 265 m <sup>2</sup>                           |
| 6 調査担当者  | 辻 裕司   |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「吉田」「岡崎」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）              |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                               |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。            |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。            |
| 12 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                         |
| 13 遺物番号  | 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。                         |
| 14 掲載写真  | 村井伸也・幸明綾子                                    |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾   |
| 16 遺物復元  | 村上 勉・出水みゆき                                   |
| 17 本書作成  | 辻 裕司   |
| 18 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・近藤章子・山口 眞                          |



(調査地点図)

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	3
(1) 基本層序	3
(2) 遺構	5
4. 遺 物	9
(1) 土器類	9
(2) 瓦 類	11
(3) 凝灰岩	14
5. ま と め	15

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	1	第 2 面	調査区全景（北から）
		2	第 2 面	調査区南半（東から）
図版 2	遺構	1	第 2 面	柱穴群（北から）
		2	第 2 面	溝 11・土坑 16 断面（東から）
		3	第 2 面	溝 12 断面（西から）
図版 3	遺構	1	第 1 面	調査区全景（北から）
		2	第 1 面	土坑 1・溝 2（東から）
図版 4	遺物	1		土坑 16 出土土師器 1
		2		土坑 16 出土土師器 2
		3		溝 11 出土土師器
図版 5	遺物	1		溝 12 出土瓦器
		2		出土凝灰岩
		3		溝 2 出土土師器
図版 6	遺物			出土軒丸瓦
図版 7	遺物			出土軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦

# 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査前全景（東から）	2
図3	作業風景（南から）	2
図4	調査区断面図（1：100）	4
図5	第2面遺構平面図（1：120）	6
図6	第1・2面遺構断面図（1：50）	7
図7	第1面遺構平面図（1：120）	6
図8	出土土器実測図（1：3）	10
図9	出土軒丸瓦拓影・実測図（1：3）	12
図10	出土軒平瓦、道具瓦拓影・実測図（1：3）	13

# 表 目 次

表1	遺構概要表	3
表2	遺物概要表	9

# 法勝寺跡

## 1. 調査経過

調査地点は、京都市左京区岡崎天王町 70 他に所在し、岡崎通と冷泉通の交差点から東へ約 160 m の地点に位置する。この場所に共同住宅が建設されることになり、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）によって試掘調査が実施された。試掘調査の結果、平安時代後期から中世の遺構・遺物が検出されたことから、発掘調査を実施することとなった。

調査対象地内の東半は、既存建物建設に際し対象地に南接する冷泉通の高さまで削平されており、東および北接する隣接地との間には約 1 m 程の段差が生じている。北西部は削平を受けることなく隣接する住宅地の地表面とほぼ同一の高さを示しており、この場所に調査区を設定した。

調査区は、隣接する住宅を考慮し、北側で幅約 10 m、南側で幅約 12 m、長さ約 26 m の範囲に設定し、重機掘削で盛土の掘下げを行った。その後、人力による調査を実施したが、既存建物基礎や既存建物解体による大規模な攪乱が分布しており、攪乱を受けた範囲は、調査区設定面積の約半分に達する。調査区南端で江戸時代の東西溝や石組土坑、および北半では一部柱穴などを検出した。写真、図面等記録の後、室町時代の遺物を包含する土層を掘り下げ、遺構検出を行った結果、南半では室町時代の東西溝である溝 11・12 や土坑、また溝 11 底面で平安時代後期の土坑 16 を、北半では柱穴多数を検出した。写真、図面等記録の後、調査区を埋め戻し、全調査を終了した。

なお、今回の調査では、後述する岡崎遺跡に関連する遺構・遺物は未検出である。

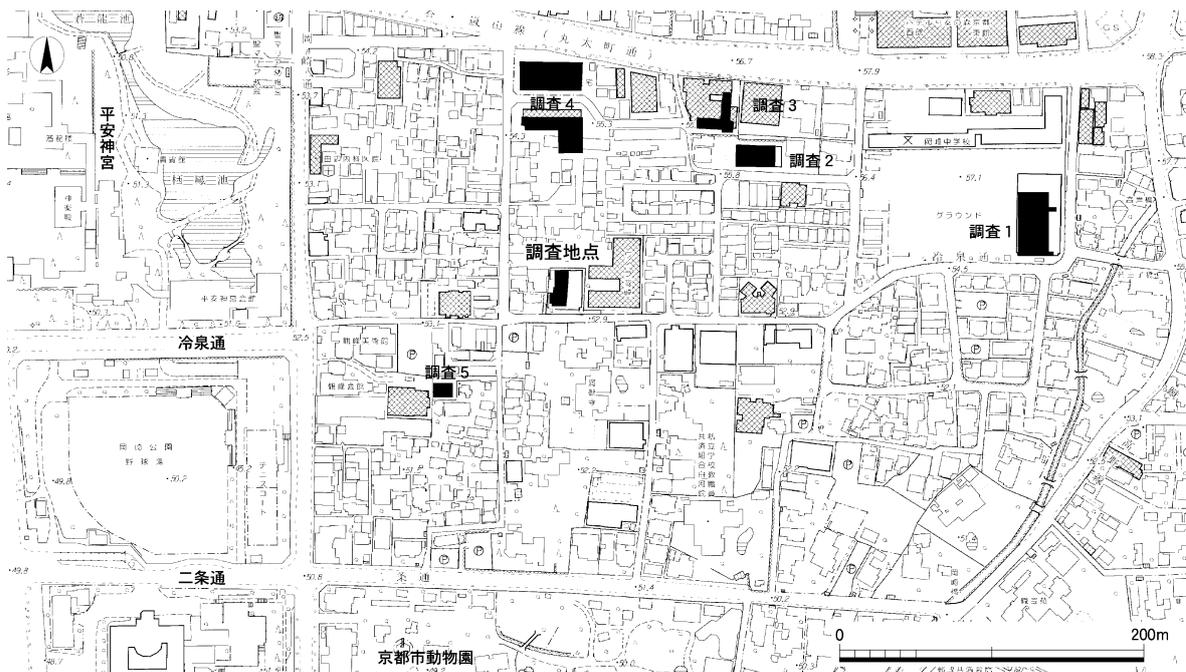


図1 調査位置図 (1:5,000)

## 2. 位置と環境

調査地点は、白川の扇状地上に立地し、遺跡の立地する基盤層はいわゆる白川砂と呼ばれる砂礫層ないし砂層をはじめ、シルト層や粘土層が堆積する。敷地周辺は東から西へ緩やかに下がる傾斜面を呈する。

調査地点周辺は、弥生時代から古墳時代の遺跡である岡崎遺跡や平安時代後期に形成された白河街区ならびに法勝寺を含む六勝寺跡に相当する。法勝寺は、白河天皇の御願寺として、承保二年（1075）に造営が開始され、承暦元年（1077）に金堂・五大堂・阿弥陀堂・法華堂など、永保三年（1083）には九重塔・薬師堂・八角堂が供養された。京都市動物園北側の発掘調査では金堂の版築基壇や礎石据付跡などが検出され、金堂の位置の一端が押さえられた<sup>1)</sup>。その後、金堂跡に東接する箇所<sup>2)</sup>の発掘調査で、金堂に取り付く軒廊や南へ延長する回廊の礎石据付跡や雨落溝を検出し、伽藍配置に占める位置および伽藍中軸線がほぼ確定した。

調査対象地西側を南北に延長する通りは、法勝寺金堂跡を含む伽藍中軸線に該当しており、調査地点は法勝寺の寺域中央東寄りの北端部に相当する。法勝寺の北限については、今回の調査地点から北側に約 130 m の地点（調査<sup>3)</sup>）、南西方向に直線距離で約 50 m の地点（調査<sup>4)</sup>）で発掘調査が実施されたが、北限を示す遺構は未検出であり、同寺の北限を示す遺構の検出が待ち望まれている<sup>5)</sup>。一方、法勝寺北側には東光寺があったとされ、周辺の調査では、平安時代後期から鎌倉時代の溝、鎌倉時代の池状落込みや石敷方形池、溝や柵、鎌倉時代から室町時代の遺構としては、造り替えが行われた溝や柵、柵と溝の間に石敷がなされた道路状遺構などが検出されている。特に、昭和 62 年度（調査<sup>6)</sup>）で検出された平安時代後期の南北方向の溝は、規模の大きさや遺物量の多さに加え、法勝寺寺域の東限に位置することとも合わせて、白河街区の区画溝と考えられている。昭和 63 年度（調査<sup>7)</sup>）、平成 13 年度（調査<sup>8)</sup>）で検出された鎌倉時代の石敷方形池は東西約 30 m、南北約 16 m になると考えられるもので、最初の瓦積み<sup>9)</sup>が石組みに替えられ、修復がされて室町時代前半に廃絶したとされ、これは法勝寺の北にあったと考えられている東光寺に付属する施設と考えられている。



図2 調査前全景（東から）



図3 作業風景（南から）

### 3. 遺 構

調査区内は、既存建物の基礎および建物解体時に遺構面が掘削されたため、ほぼ全面にわたり大規模な攪乱を受けていた。このため、遺構面の遺存状況は不良であるが、遺構面の遺存する箇所では、次に示すような多くの調査成果を得ることができた。調査区の現況は、北半および南半はほぼ平坦であるが、X=-109,219 付近で南へ急激に下がる段差があり、北半と南半の現地表面での比高差は約 0.7 m ある。

#### (1) 基本層序

前述のような状況により、北半と南半に分けて層序の概要を示す（図4）。

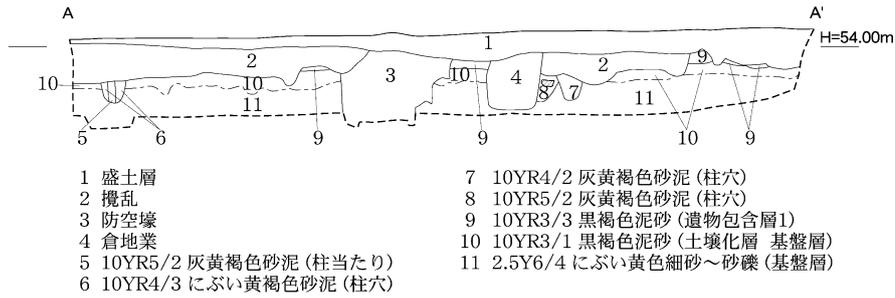
北半の基本層序は、上層から盛土が厚さ 0.05 ～ 0.4 m ある。盛土層下には建物解体時に攪乱を受けた土層が厚さ 0.1 ～ 0.5 m あり、北半のほぼ全面に及ぶ。攪乱を免れた箇所では、盛土層直下に遺物包含層が堆積しており、この遺物包含層を第1層とした。第1層は黒褐色泥砂層で、粗砂・細礫を含み、厚さ 0.06 ～ 0.3 m ある。第1層上面の標高は、遺存状態の良い箇所ではほぼ標高 54 m を示しており、調査区の北半では平坦である。第1層には平安時代後期に属する瓦や、平安時代後期から室町時代後期に属する 1 ～ 2 cm 前後の土師器細片を多く包含する。北半で検出した柱穴や土坑などは、この第1層上面で検出できたと考えられるが、遺構の埋土と第1層の土層が近似しており、多くの遺構は基盤層上面で検出せざるを得なかった。第1層の下層にはにぶい黄褐色砂泥層がみられるが、この土層は調査区北半の西壁付近にのみ堆積している。基盤層の窪みに堆積した土層と考えられ、第2層とした。第2層からは室町時代と考えられる土師器細片、平安時代後期の瓦などが出土した。第1層ないし第2層下は基盤層となり、にぶい黄色粗砂・細砂などが堆積する。地点によっては径 2 ～ 10 cm 大の礫を含む砂礫層が堆積する。基盤層の上層であるにぶい黄色細砂層の上面は、土壌化しており黒褐色を呈する。

南半の基本層序は、積土層が厚さ 0.02 ～ 0.2 m あり、積土層直下が遺構上面あるいは基盤層となる。基盤層上面の標高は 53.2 ～ 53.3 m ある。基盤層上面にはわずかではあるが土壌化層が遺存しており、北半の基盤層である土壌化層上面との比高差は 0.5 ～ 0.6 m ある。したがって、旧地形もこの箇所でやや南に下がる変化点を示すものと考えられ、現地表面での変化点の現況と近似している状況が窺われる。

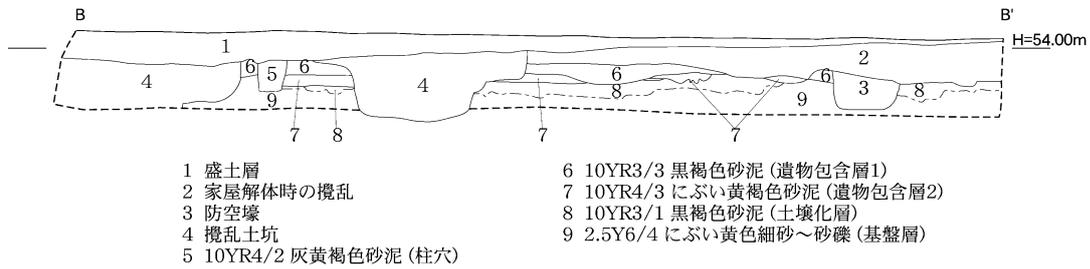
表1 遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代	土坑16・56
室町時代	溝11・12、土坑17・34、 柱穴7～9・19～23・25・26・30～33・35～48・50～55・57・59～66・68
江戸時代	溝2、土坑1

北壁断面

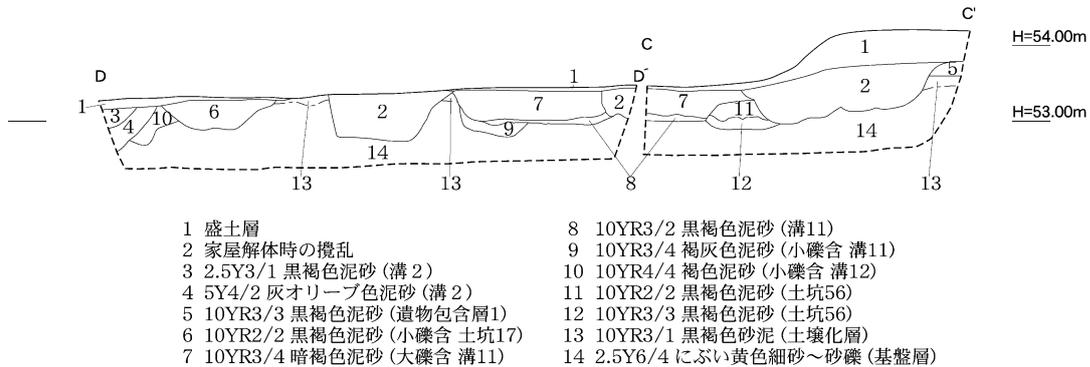


西壁断面 1



西壁断面 3

西壁断面 2



南壁断面

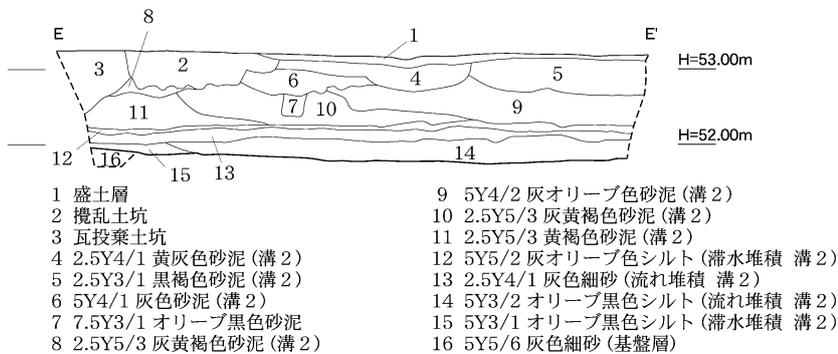


図 4 調査区断面図 (1 : 100)

## (2) 遺構

今回検出した遺構には、平安時代後期、室町時代後期、江戸時代に属するものがある。次に主要な遺構について概要を示す。

### 平安時代後期の遺構 (図5)

平安時代後期の遺構には土坑が2基ある。調査区中央南半の旧地形変化点付近で検出している。

土坑 16 調査区中央南半の旧地形変化点付近で検出した土坑である。後述する室町時代後期の溝 11 を完掘した時点で溝の底面で検出しており、上部は削平を受けていると考えられる。北西肩口は調査区外にある。平面形はやや歪な楕円形を呈し、検出面での規模は、長さ約 4.3 m、深さ約 0.6 m である。肩口はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は上層が黒褐色泥砂、下層が黒色泥砂で明黄褐色粗砂がブロックで混入する。遺物は細片ではあるが土師器が比較的多く出土した。

土坑 56 土坑 16 の北側で検出した土坑である。南半は溝 11 および土坑 16 によって削平を受け、西は調査区外へ広がる。検出面での規模は、深さ約 0.4 m である。埋土は上・下層とも黒褐色黒褐色泥砂が堆積する平安時代後期と考えられる土師器の細片が出土した。

### 室町時代後期の遺構 (図5)

室町時代後期の遺構には溝・土坑・柱穴などがある。

溝 11 調査区の南半で検出した東西方向を示す溝で、東西は調査区外へ延長する。溝東部は攪乱で上部削平を受ける。底面はほぼ平坦で、東西端の比高差は 0.05 ~ 0.2 m あり、西へ向かって緩傾斜を呈する。検出面での規模は、検出長 12.2 m、幅約 3.5 m、深さ 0.44 ~ 0.61 m である。埋土は 1・2 層とも黒褐色泥砂で、土師器細片が多量に含まれる。2 層には 3 ~ 10 cm 大の礫や平安時代の瓦が多量に分布する。3 層は黒褐色泥砂で基盤層の粗砂ブロックが含まれる。4 層は褐灰色泥砂で、南肩口から底面にかけて堆積する。

溝 12 溝 11 の南側で検出した東西方向を示す溝で、東西は調査区外へ延長する。上部および南肩口は、江戸時代の溝 2 により削平を受ける。底面は凹凸があり、肩口が立ち上がる箇所もあるため、見かけ上、東西方向に長い土坑が連続する形状を呈する。東西端の比高差は約 0.2 m あり、西へ向かって緩傾斜を呈する。検出面での規模は、検出長 11.9 m、幅 0.47 ~ 1.5 m、深さ 0.22 ~ 0.53 m である。埋土は 1 層が黒色泥砂で径 0.5 ~ 1 cm の礫を含む。2 層は粗砂ブロックを含む黒褐色泥砂、3 層は泥砂ブロックを含むにぶい黄橙色粗砂である。このうち、2 層から完形に近いものを含む瓦器鍋が 3 個体出土している。

なお、溝 11・12 の肩口間の距離は 3.7 ~ 4 m である。

土坑 17 調査区の南西端の溝 12 上面で検出した、北東-南西方向を示す土坑で、西肩口は調査区外にある。平面形は長方形を呈し、検出面での規模は、検出長約 1.7 m、幅約 0.8 m、深さ約 0.4 m である。埋土は 1 層が粗砂・細礫を含む黒褐色泥砂層で、礫・瓦を多く含む。2 層は浅黄橙色泥砂で、北半に堆積する。軒丸瓦、丸・平瓦が出土した。

土坑 34 調査区の中央部で検出した土坑で、平面形が北東-南西に長い楕円形を呈し、検出面での規模は長径約 3.1 m、深さ約 0.35 m である。埋土は上層が黒色泥砂、下層が黒褐色泥砂層で、

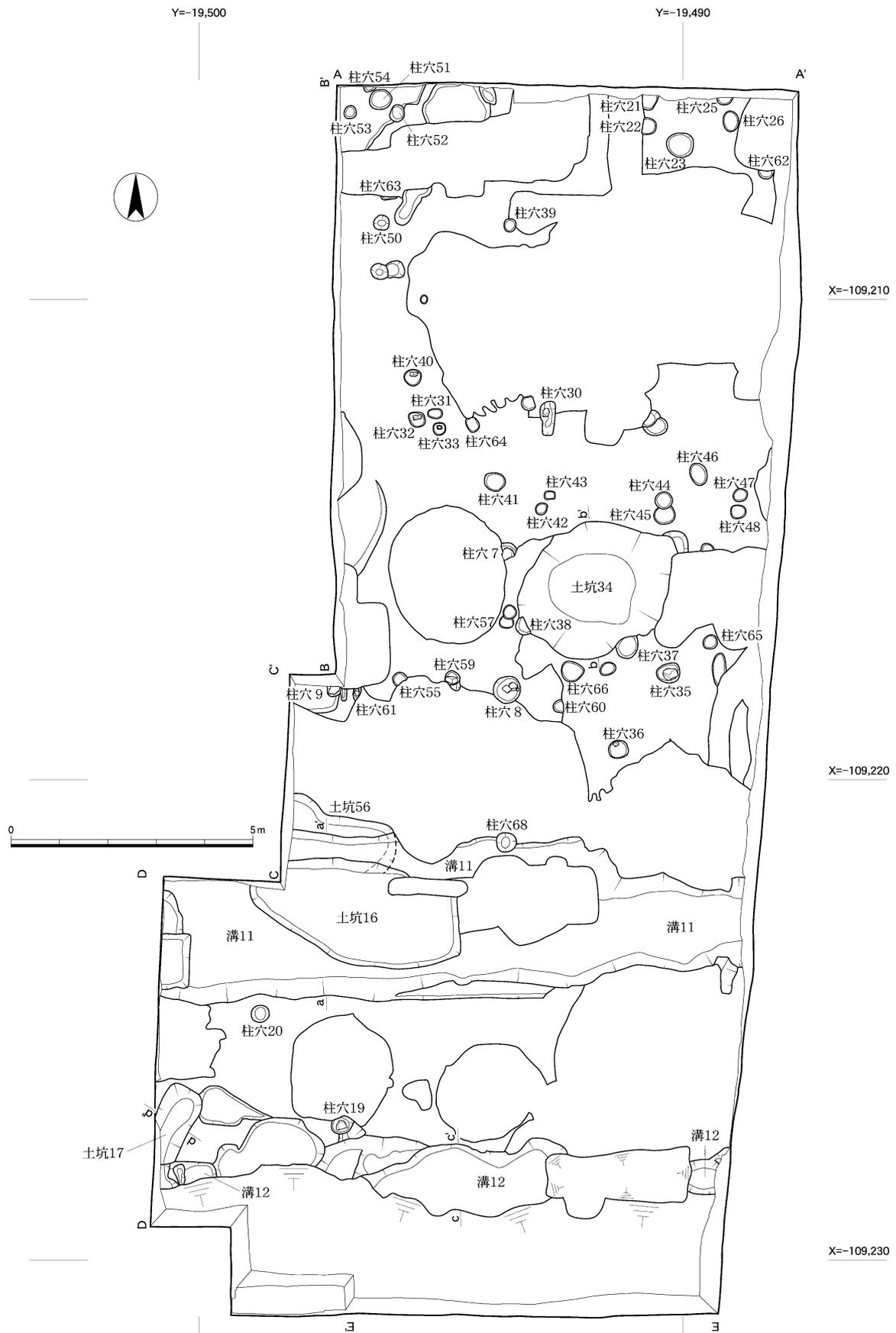


图5 第2面遺構平面图 (1 : 120)

下層から鬼瓦が出土した。

柱穴 柱穴は概して調査区北半に分布し、約 40 基検出した。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径 0.15 ～ 0.6 m あり、深さは 0.05 ～ 0.4 m あり、浅いものが多い。素掘りのものと底面に根石を据えるものがある。概して調査区の中央部に分布する柱穴には根石を据えるものが多く、柱穴 7 ～ 9 ・ 19 ・ 35 ・ 36 ・ 40 ・ 59 ・ 65 がある。柱当たりが確認できる柱穴では、径 0.12 ～ 0.16 m あり、攪乱により柱穴間に連続性を確認できず、建物としてまとまるものはないが、柱穴 7 - 8 と柱穴 8 - 9 はいずれも根石を有し、軸線は直交する。柱穴 7 - 8 間は 2.8 m、柱穴 8 - 9 間は 3.5 m あり。柱穴からは室町時代後期と考えられる土師器の細片が出土した。なお、北半に比べ、南半では柱穴 19 ・ 20 の 2 基を検出したに過ぎない。

### 江戸時代前期の遺構 (図 7)

江戸時代前期の遺構には溝・土坑などがある。

溝 2 調査区の南端で検出した東西方向を示す溝である。東西は調査区外へ延長し、南肩口は調査区外へ広がる。肩口から調査区の南端まで傾斜し、底面は未検出である。検出面での規模は、検出幅約 2.8 m、深さ約 1.4 m あり。埋土は、下層からオリーブ黒色シルト層、灰色細砂層、灰オリーブ色シルト層などが堆積し、シルト層中には流水堆積を示すラミナがみられる。これら自然堆積土層上面には、黄褐色砂泥層、灰黄褐色砂泥層、灰オリーブ色砂泥層、灰黄褐色砂泥層などが堆積する。これら土層は、溝を人為的に埋め立てた土層で、東側から西へ向かって順次堆積する。灰黄褐色泥砂層からは、土師器皿がまとまって出土した。また、平安時代後期の瓦も各土層から出土している。

土坑 3 調査区南部、溝 2 上面で検出した土坑である。平面形は歪な円形を呈し、検出面での

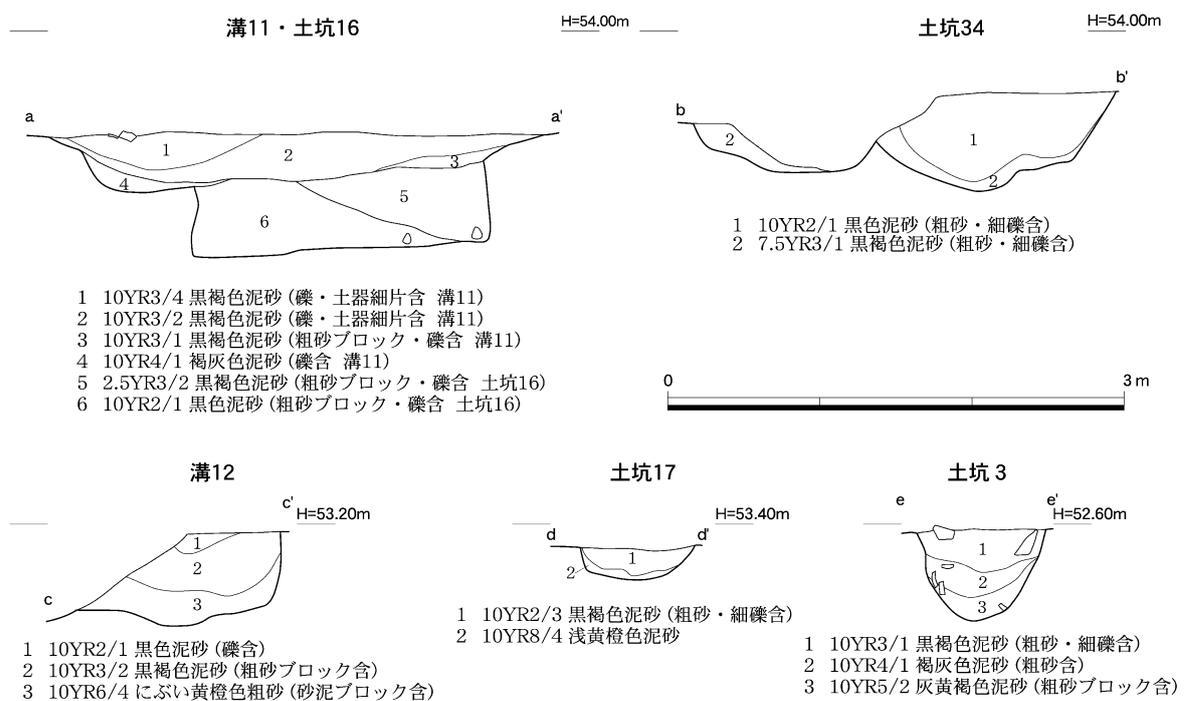


図 6 第 1・2 面遺構断面図 (1 : 50)

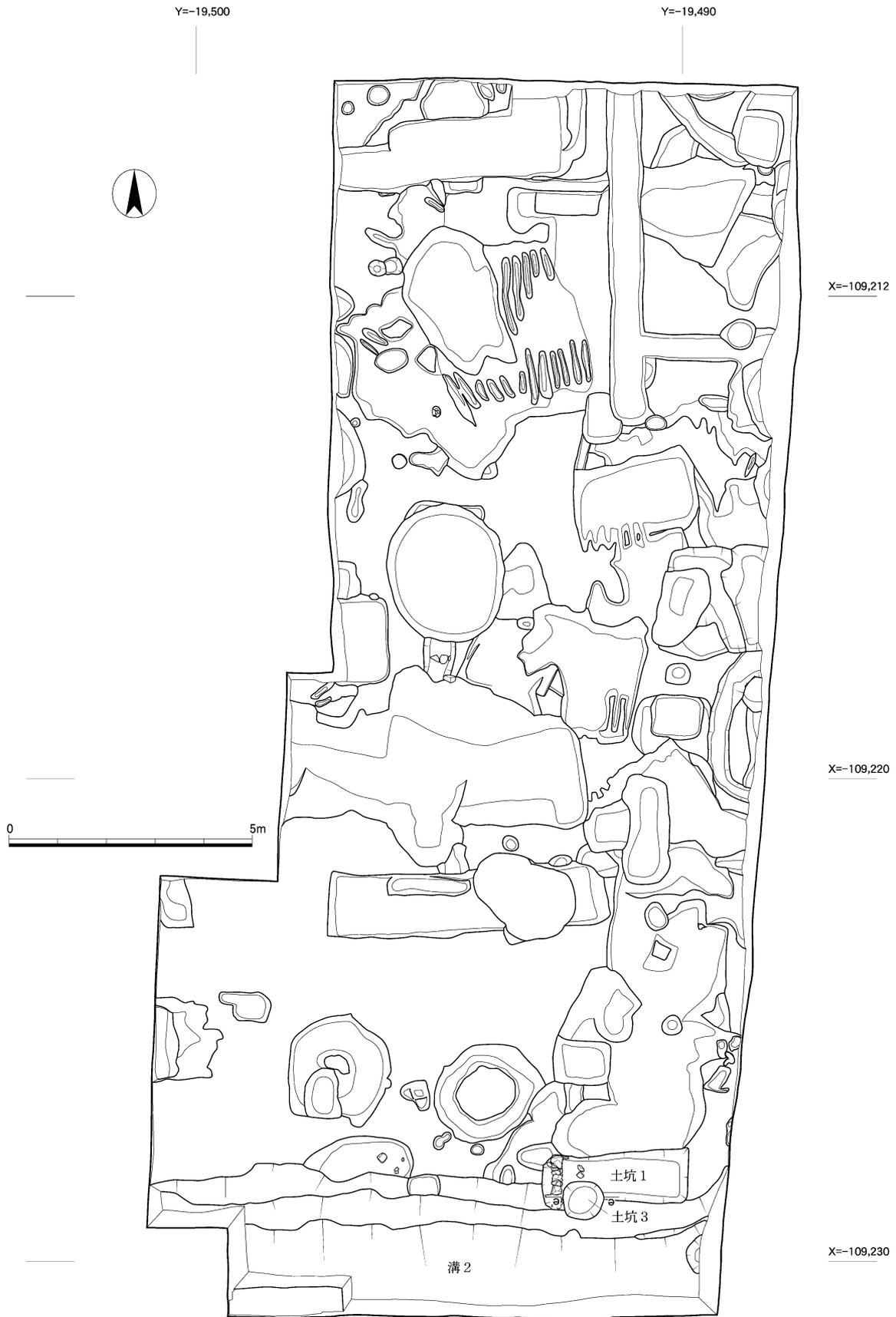


图7 第1面遺構平面図（1：120）

規模は、径約 0.8 m、深さ約 0.6 mある。埋土は 3 層あり、上から黒褐色泥砂層、褐灰色泥砂層、灰黄褐色泥砂層が堆積する。上層から下層の壁際にかけて平安時代後期に属する瓦片が多数出土した。

土坑 1 調査区南部、溝 2 上面で検出した土坑である。平面形は東西に長い長方形を呈する。大半は攪乱を受け遺存状態は不良であるが、西端部は石組みが遺存している。検出面での規模は、長さ約 2.2 m、幅約 1.1 m、深さ約 0.6 mある。埋土は 3 層あり、上から黒褐色泥砂層、褐灰色泥砂層、灰黄褐色泥砂層が堆積する。上層から下層の壁際にかけて平安時代後期に属する瓦片が多数出土した。

## 4. 遺 物

### (1) 土器類

平安時代後期の土器類 (図 8- 1 ~ 18)

平安時代後期の遺物は、平安時代から室町時代の遺構や土層から出土した。このうち、次に示す土坑 16 以外では、土師器のほか緑釉陶器・灰釉陶器があるが、細片である。

土坑 16 出土土器 土坑 16 からは、細片を多く含むものの平安時代後期に属する土師器が多く出土した。また、楠葉系と考えられる瓦器碗片が 1 点あるが細片で図示できない。

(1 ~ 12) は下層出土土器である。1 ~ 3 は小型の皿 A で、口縁部はやや屈曲し、端部は丸くおさめる。口径 9.2 ~ 9.8 cm、3 の器高 1.5 cm。4 ~ 12 は皿 N で、口縁部外面には 2 段ナデを行い、口縁端部はやや外反する。4 ~ 6 は小型皿で、口径 9.8 ~ 10.8 cm、器高 1.9 cm。7 ~ 12 は大型皿で、口径 13.4 ~ 15.4 cm、10 の器高 2.5 cm。V 期古と考えられる<sup>9)</sup>。

(13 ~ 18) は上層出土土師器である。13 は小型の皿 A で、口縁部はやや屈曲し、端部は丸くおさめる。口径 10.3 cm、器高 1.4 cm。14 は皿 Ac で、口縁部は強く内方へ折り曲げ、端部は丸く

表 2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、凝灰岩	27箱	土師器18点、軒丸瓦9点、軒平瓦4点、道具瓦1点、凝灰岩2点	2箱	21箱
室町時代	土師器、瓦器、中世須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器	3箱	土師器3点、瓦器3点	0箱	2箱
江戸時代	土師器、国産陶磁器、丸瓦、平瓦	2箱	土師器14点	0箱	2箱
合 計		32箱	54点 (5箱)	2箱	25箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A ランクの遺物を抽出したため、出土時より 2 箱多くなっている。

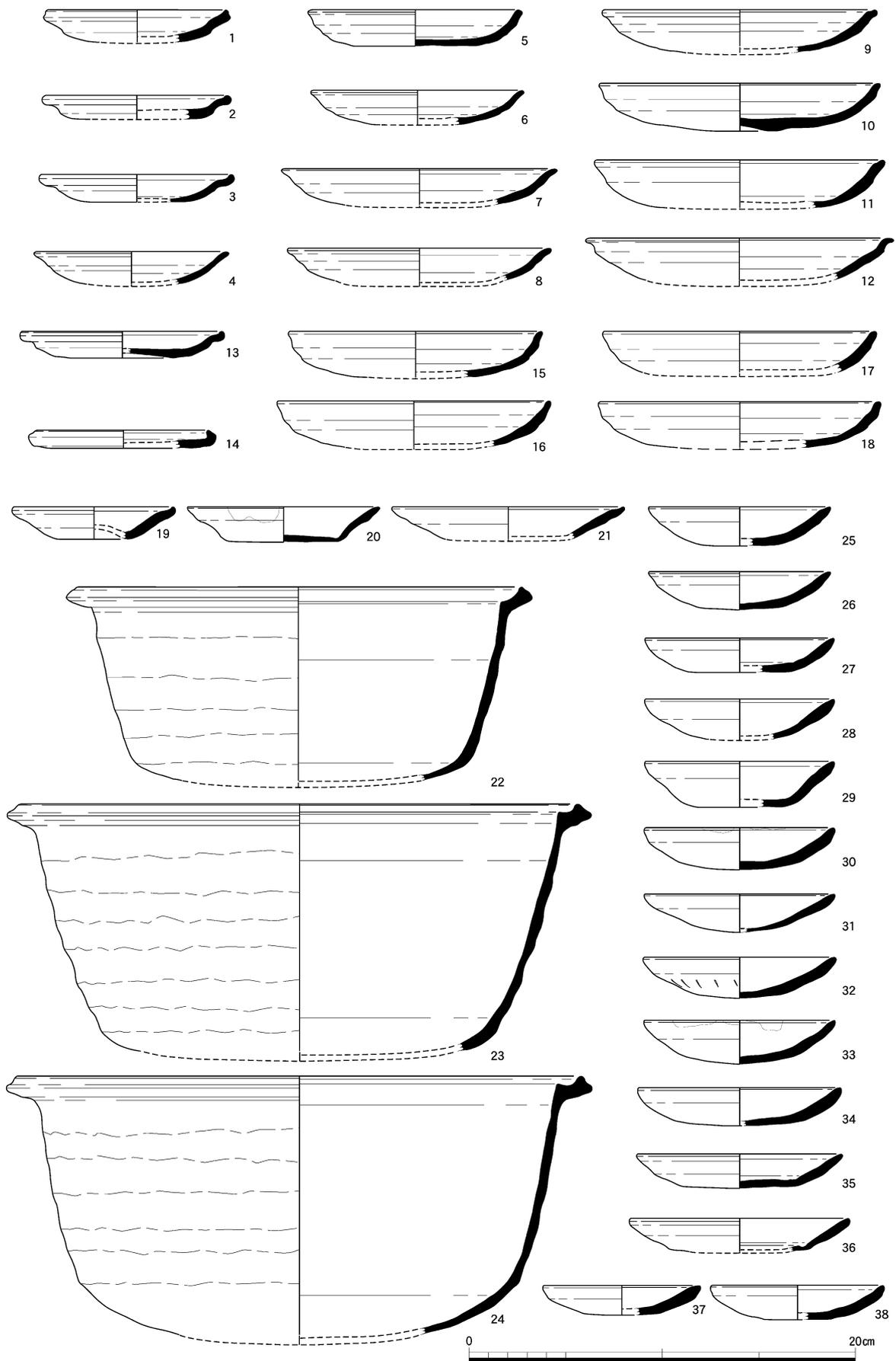


图8 出土土器实测图(1:3)

おさめる。口径 9.8 cm、器高 1.0 cm。15～18 は皿 N で、口縁部外面には 2 段ナデを行い、15 は口縁端部はやや外反し、16～18 は上方へ立ち上がる。15 は中型皿で、口径 13.0 cm。16～18 は大型皿で、口径 14.0～14.4 cm。V 期古と考えられるが、下層出土土器よりもやや新相である。

#### 室町時代後期の土器類 (図 8-19～24)

室町時代の遺物は、溝 11・12 や第 1・2 層などから、土師器・中世須恵器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦器などが出土したが、溝 11・12 出土の土師器・瓦器以外は細片で図示できない。

溝 11 出土土器 (19～21) は溝 11 出土土師器である。19 は皿 Sh で、底部は上方に突き出し、口縁部は屈曲して立ち上がり、端部は丸くおさめる。口径 8.2 cm、器高 1.7 cm。20 は皿 N で、口縁部は屈曲して開き、端部は丸くおさめる。口縁部外面に煤が付着する。口径 9.8 cm、器高 1.85 cm。21 は皿 S で、口縁部はわずかに屈曲して開き、端部は丸くおさめる。口径 11.9 cm。VIII 期新前後と考えられる。

溝 12 出土土器 (22～24) は溝 12 出土瓦器鍋である。下方に膨らむ底部から体部はやや開きぎみに立ち上がる。受け部幅は狭く、口縁部は斜め上方に短く立ち上がる。口径 23.0～29.2 cm、現存高 10.1～13.5 cm。VIII 期新前後と考えられる。

#### 江戸時代初頭の土器類 (図 8-25～38)

江戸時代初頭の遺物は、溝 2 などから出土しており、土師器・施釉陶器などが出土している。

溝 2 出土土器 (25～36) は溝 2 第 2 層出土土師器である。25～34 は皿 Sb で、小さい底部から口縁部は外上方に開き、端部は丸くおさめる。30・32・33 の口縁部内外面には煤が付着する。32 の体部下半外面には爪状圧痕が巡る。口径 9.3～10.4 cm、現存高 2.0～2.4 cm。XI 期古前後と考えられる。(37・38) は溝 2 第 1 層出土土師器である。口径 8.0～8.8 cm、高さ 1.6～1.8 cm。

## (2) 瓦類

瓦類のうち、丸瓦・平瓦はほぼ調査区全域ならびに各遺構から満遍なく出土しているが、細片が多く図示していない。

#### 軒丸瓦 (図 9-39～47)

軒丸瓦は 12 点出土したが、図示できない小片のものもある。大半は溝 2 および攪乱から出土している。

(39) は単弁 10 弁蓮華文軒丸瓦である。中房はわずかに膨らみ、0+3 の蓮子を配する。外区には粗く蓮子を配する。瓦当部裏面上端に丸瓦を当て、凹面に補足粘土を貼り付け接合する。子葉と蓮弁間および外区珠文に範傷がある。瓦当部側面下半は横方向のヘラケズリ、瓦当部裏面下半は横方向のヘラケズリ、上半は不定方向のナデを行う。胎土は細砂を多く含み、色調は内外面とも黒灰色を呈する。やや軟質である。山城産で、平安時代後期と考えられる。『木村』<sup>10)</sup> 45 と同文である。(40) は複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当部裏面上端に丸瓦を当て、上下に補足粘土を貼り付け接合する。遺存部分の右下外区に範傷がある。瓦当部側面上半は縦方向のナデ、瓦当部裏面上半は横方向のナデを行う。瓦当から丸瓦部にかけて縦方向のヘラケズリないしナデを行う。

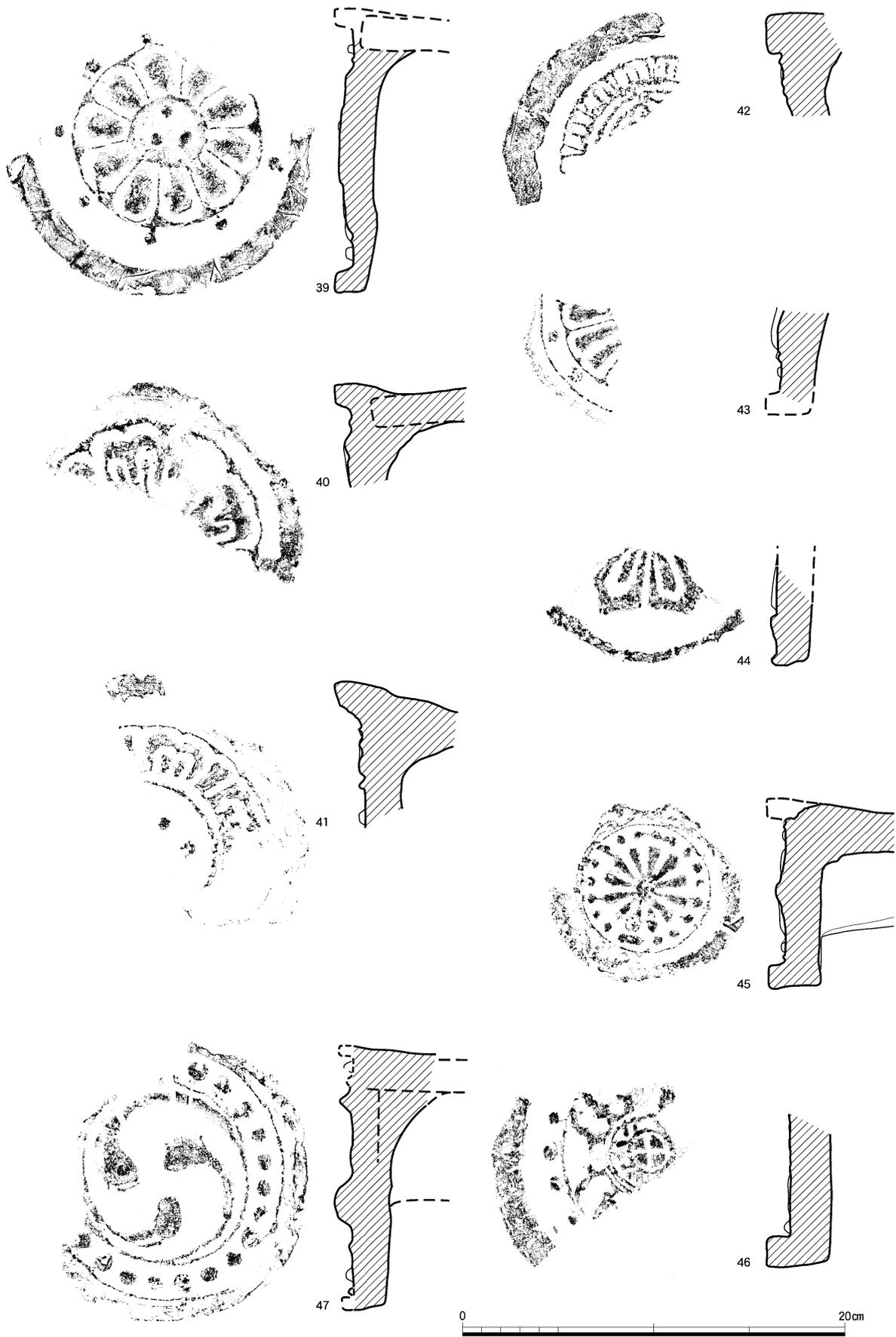


图9 出土軒丸瓦拓影・実測図（1：3）

胎土および外面は茶灰色を呈する。平安時代後期と考えられる。(41)は複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。外区には粗く珠文を配する。瓦当部裏面上端に丸瓦を当て、上下に補足粘土を貼り付け接合する。中房には1+8の蓮子を配する。瓦当部側面上半および瓦当部裏面上半は横方向のナデを行う。胎土は灰色、外面は黒灰色を呈する。播磨産で、平安時代後期と考えられる。『木村』390と同文である。(42)は複弁13弁蓮華文軒丸瓦である。外区に密に珠文を配する。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を貼り付け接合する。瓦当部上部は縦方向のヘラケズリ。瓦当部裏面はナデを行う。胎土は灰色、外面は黒灰色を呈する。平安時代後期と考えられる。(43)は複弁蓮華文軒丸瓦である。外区には粗く珠文を配する。瓦当部裏面はナデを行う。胎土は灰色、外面は黒灰色を呈する。焼成は良好である。平安時代後期と考えられる。『木村』399と同文の可能性はある。(44)は剣頭文軒丸瓦である。瓦当部側面下半は横方向のナデ、上半は縦方向のナデ。瓦当部上端は横方向のナデ、瓦当部裏面はナデを行う。胎土は黒灰色、外面は黄灰色を呈する。『木村』554と同文、『法勝寺<sup>11)</sup>』14と同範である。平安時代後期と考えられる。土坑17から出土した。(45)は単弁12弁蓮華文軒丸瓦である。中房は盛り上がり、蓮子を1つ配する。蓮弁は幅狭い。外区に密に珠文を配する。瓦当面には珠文間、蓮弁と珠文間などに範傷が複数ある。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、凸面に粘土を貼り付け接合する。瓦当部側面下半は横方向のナデ、上半は縦方向の

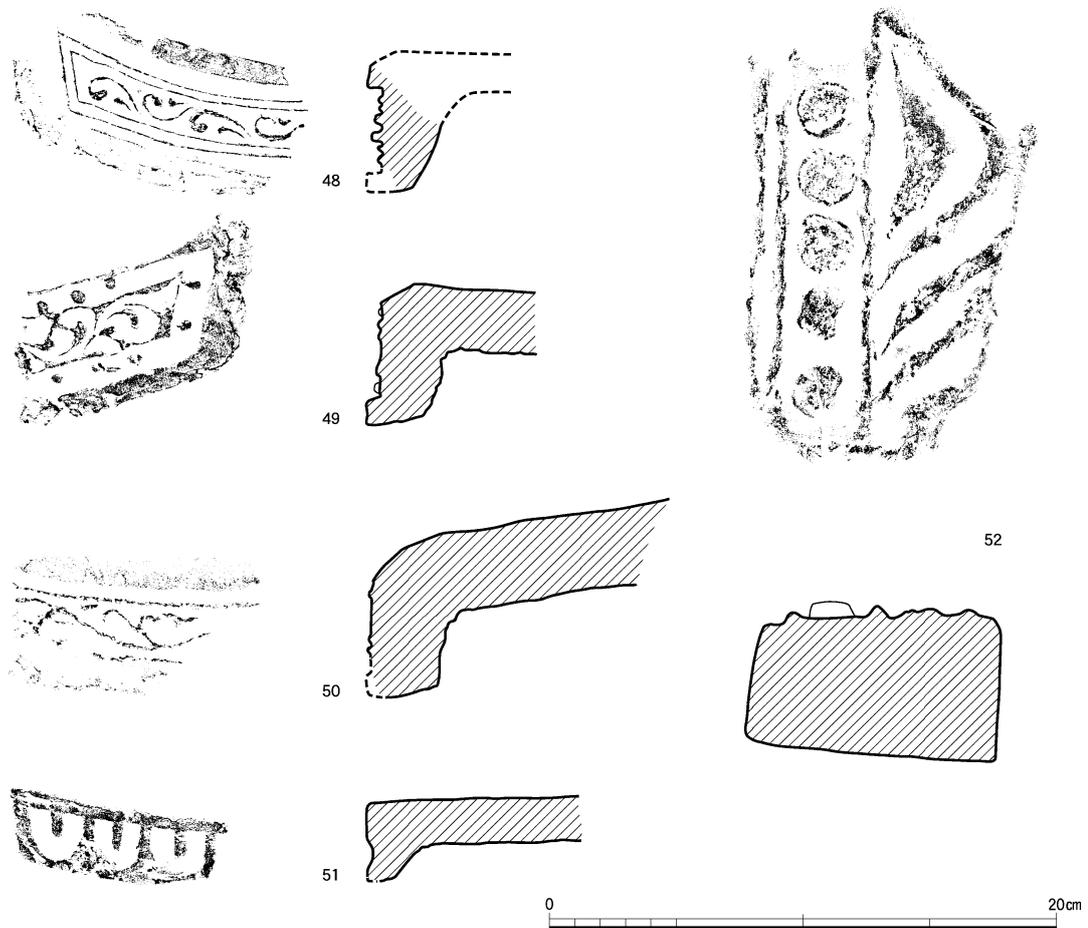


図10 出土軒平瓦拓影・実測図(1:3)

ナデ。瓦当部裏面は不定方向のナデで平滑に仕上げ、上端は接合時の横方向のナデ。丸瓦部下端は縦方向のヘラケズリ。胎土は灰色を呈し、細砂を多く含む。焼成は良好である。鎌倉時代と考えられる。(46)は三鈷文軒丸瓦である。外区に密に珠文を配する。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、補足粘土を貼り付ける。中房には十字の凹線を配する。瓦当部側面は横方向のナデ、瓦当部裏面下半は横方向のナデを行う。胎土は細砂を多く含み、内外面とも黒灰色を呈する。鎌倉時代と考えられる。(47)は右巻き三巴文軒丸瓦である。尾は接する。外区に密に珠文を配する。瓦当部裏面上端に丸瓦を当て、補足粘土を貼り付け接合する。瓦当部側面下半は横方向のナデ、上半は縦方向のヘラケズリ。瓦当部裏面下半は斜め方向のヘラケズリ、上半は接合時の横方向のナデ。胎土は灰白色を呈し、細砂を多く含む。外面は黒灰色を呈する。鎌倉時代と考えられる。

#### 軒平瓦 (図 10-48 ~ 51)

軒平瓦は 5 点出土したが、図示できるものは 4 点ある。

(48)は唐草文軒平瓦である。瓦当は折り曲げ成形である。瓦当面には 2 重の界線を巡らし、界線左上隅に範傷がある。瓦当面周縁上部は横方向のナデ、側縁はヘラケズリ、瓦当裏面は縄タタキを行う。胎土は細砂含み、内外面とも灰白色を呈する。焼成は硬質である。丹波産で平安時代後期と考えられる。(49)は唐草文軒平瓦である。瓦当は折り曲げ成形である。外区には珠文を配し、下外区から右外区にかけての珠文には範傷が複数ある。顎部裏面上端には曲げ皺がある。顎部凸面ならびに瓦当裏面は縄タタキを行う。瓦当面周縁上端は横方向の、側面は縦方向のヘラケズリを行う。胎土は細砂を含み灰色、外面は黒灰色を呈する。焼成は硬質である。丹波産で平安時代後期と考えられる。『木村』592 と同範である。(50)は唐草文軒平瓦である。瓦当は折り曲げ成形である。平瓦凸面には糸切り痕跡が残る。瓦当面周縁上部は横方向のナデ、瓦当裏面には糸切り痕跡が残り、上端はオサエ。胎土は細砂を含み灰色、外面は黒灰色を呈する。焼成はやや軟質である。平安時代後期と考えられる。昭和 59 年度概要の尊勝寺跡<sup>12)</sup>図 7-33 と同文。(51)は剣頭文軒平瓦である。瓦当部は貼り付け成形である。顎部裏面上端には凹型台の圧痕が残る。平瓦部凹面は横方向のナデで布目がわずかに残り、凸面はオサエないしナデを行い、凹凸がある。瓦当面側面は縦方向のナデを行う。山城産で鎌倉時代と考えられる。『木村』457 と同文である。

#### 道具瓦 (図 10-52)

(52)は土坑 34 から出土した鬼瓦の破片である。瓦当面の外縁部には平行する 2 条の界線内に大粒の珠文を密にを配する。裏面および外縁部はナデ、内縁部はヘラケズリを行う。胎土は灰白色、外面は黒灰色を呈する。やや軟質である。

### (3) 石製品

#### 凝灰岩 (図版 5-53・54)

(53・54)は加工を施した痕跡を有する凝灰岩である。いずれも攪乱から出土したものである。53 は平面形および断面形が長方形を呈し、長辺の一端は切損する。表面の風化は激しいが、長軸方向の 4 面ならびに一方の端面は、かろうじて面が遺存する。現存での規模は、長さ 44 cm、幅 36 cm、

厚さ 22 cm である。表面には火を受けて焼け焦げた箇所がある。54 は底面・側面・斜辺面が遺存するもので、現存での規模は、高さ 9 cm、幅 17 cm、奥行き 18 cm である。斜辺面は底面に対し約 35° の傾斜角度を有する。

## 5. ま と め

今回の調査では多くの成果を得ることができた。次にその概要を示す。

法勝寺には数多くの堂宇が建立されていた。法勝寺跡におけるこれまでの調査では、主要建物である金堂および金堂に取り付く軒廊や南に延長する回廊などが検出され、これらの遺構の検出により同寺主要建物の中軸線は確定された。今回の調査地点は中軸線からやや東に位置する。

前述したように、法勝寺の北限については、調査 4 や調査 5 でそれぞれ発掘調査が実施されたが、北限を示す遺構は未検出である。今回の調査地点が冷泉通（冷泉小路末相当路）に面することから北限に関する何らかの境界を示す遺構の検出が期待されたが、区画を示す遺構は未検出であり、土坑 1 基を検出したにとどまる。このことは、調査面の多くが攪乱を受けていたことを考慮しても遺構の密度は希薄であり、当該地が空閑地的な様相を呈していたことが窺われる。

一方で、年代は下るが、調査区南半では室町時代後期に属すると考えている東西方向に延長する溝 11・12 を検出している。この 2 条の溝間では柱穴 2 基を検出したにとどまり、北半で検出した柱穴群の分布とは対照的である。また、溝 11・12 は出土遺物から同時期の溝と考えており、溝 11・12 は当該地域を南北に分ける境界を示す遺構の可能性が高いと考えられる。

さらに、江戸時代初頭に埋没したと考えている溝 2 は溝 12 に接して位置しており、時代を超えてほぼ同一箇所に東西溝がある。溝 2 は現存幅約 3 m、検出面からの深さは約 1.3 m である。底面は未検出であることから、復原できる肩口幅は少なくとも 6 m 以上あると考えられ、大規模な堀の形状を呈する。今回の調査地点から南西方向に直線距離で約 50 m の地点（2007 年度調査）の発掘調査では、調査区西端部で南北溝が検出された。西肩が調査区外に広がるが現存幅は約 2 m、深さ約 0.8 m あり、この溝は岡崎郷（村）の西を限る境界施設と考えられている。この溝と今回検出した溝 2 は規模などが類似しており、溝 2 も何らかの意図をもった境界施設であると考えられる。江戸時代には岡崎村は上・中・下に別れており、村内の境界を示す遺構であるとも考えられる。

このように、室町時代から江戸時代にかけてこの場所には東西方向の溝ないし堀が延長しており、また、溝間には遺構の分布が希薄であることから、当該箇所に境界意識が働いていたことが窺われる。現在、調査対象地南を東西に延長する冷泉通は平安時代の冷泉小路末に該当する。冷泉通を含むこの場所が境界としての機能を維持し続けた可能性があり、法勝寺の北限を考える上で一つの手懸りとなる。

註

- 1) 「法勝寺跡」『京都市埋蔵文化財年次報告』1974-Ⅱ 京都市文化観光局文化財保護課 1975年  
「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975 京都市文化観光局文化財保護課 1976年
- 2) 『法勝寺跡発掘調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 3) 『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2005-4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 4) 「法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成19年度 京都市文化市民局 2008年発行予定
- 5) 法勝寺を含めた白河街区については次の論考がある。  
『六勝寺と白河御所』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年  
浜崎一志「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅳ 京都大学埋蔵文化財研究センター 1991年  
上村和直「平安京と白河」『条里制・古代都市研究』通巻第15号 条里制 古代都市研究会 1999年
- 6) 「岡崎遺跡・法勝寺隣接地」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 7) 「白河街区・岡崎遺跡2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 8) 『白河街区・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 9) 遺物の編年については次の文献を参照した。  
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 10) 『木村捷三郎収集瓦図録』京都市文化市民局 1996年
- 11) 前掲2と同じ
- 12) 「尊勝寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年

# 图 版



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ほっしょうじあと							
書名	法勝寺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-9							
編著者名	辻 裕司							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほっしょうじあと 法勝寺跡	きょうとしぎきょうく 京都市左京区 おがぎてんのうちょう 岡崎天王町70  他	26100	417-1	35度 00分 48秒	135度 47分 22秒	2007年10月 24日～2007 年11月27日	265m <sup>2</sup>	住宅建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法勝寺跡	寺院跡	平安時代	土坑	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、凝灰岩		六勝寺の筆頭伽藍である法勝寺創建の頃に該当する土坑を検出した。また、室町時代に属する2条の東西溝や、江戸時代に属する東西溝を検出しており、少なくとも当該箇所が中世以降、何らかの境界を示す地点であったことを明らかにした。		
		室町時代	溝、土坑、柱穴	土師器、瓦器、中世須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器				
		江戸時代	溝、土坑	土師器、国産陶磁器、丸瓦、平瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-9

## 法勝寺跡

発行日 2007年12月28日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961